兵庫JCC

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

■ 第　14　号
■ 1990年４月25日発行
■ 編集発行
兵庫県協同組合連絡協議会
Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives
■ 編集事務局
〒650 神戸市中央区海岸通１番地
兵庫県農業協同組合中央会
TEL.（078）333－5888

目次

1．環境問題で活発な意見交換 …… 1
～第４回協同組合婦人交流会開く～
2．いま、協同組合では …… 3
3．協同組合運動への提言 …… 6
神戸市外国語大学生協　理事長 小林 致広
4．協同組合の新しい流れをつくるために …… 7
～第2回兵庫県協同組合研究会開く～
5．協同組合運動に生きる …… 9
神戸市西農協 企画監査室長　中尾　脩
6．やさしい協同組合論（最終回） …… 10
7．協同組合点描 …… 11
兵庫福祉生協 統括部長　漁士　優
東条農協　参 事　武中　史郎
8．協同組合研究　NOW〈最終回〉 …… 12

環境問題で活発な意見交換
～第４回協同組合婦人交流会開く～

“合成洗剤による水質汚染など、環境問題について考えよう”と３月15日、兵庫ＪＣＣ主催で神戸市東灘区の灘神戸生協・シーアに農協、漁協、生協の婦人組織のリーダーら約30人が集まり、第４回協同組合婦人交流会を開かれた。交流会では各協同組合で取り組んでいるせっけん使用運動などが報告され、環境問題に取り組む意義を確認しあった。

◇

この交流会は、毎年１回開かれているが、第４回の今年は、最近とくに大きな話題となっている環境問題をテーマにあげた。

まず、灘神戸生協理事の光田嘉子氏が、同生協で取り組んでいる「排水チェック活動」の過去７年間のまとめを報告。この活動は、組合員家庭で使用している洗剤の種類や方法をアンケート形式で調査したもので、その結果によると、1984年を境に、せっけん・複合せっけんの使用者が年々減少していること、年代別にみると若い世代ほどせっけん離れが目立つことを強調した。このことについて光田氏は、「コンパクト型合成洗剤のコマーシャルの大攻勢や、生協の活動エリアに進出している訪問販売による外資系合成洗剤の影響を大きくうけている。」と指摘した。

「排水チェック活動」の報告をする
灘神戸生協　光田理事

また、排水チェックを２回以上経験している人は、１回だけの経験者よりも洗剤の使用量や廃油の処理に気をつけている傾向があり、排水チェック表をつけることによって、くらし方を変えている人も多いと考えられることから、チェックの繰り返しの大切さを強調した。

同生協は、1989年度の総代会で「くらしの見直しと地球環境を守るとりくみを強める特別決議」を採択し、環境問題対策会議を設けて、環境にやさしい商品の開発や、くらしの提案をおこなっている。

つぎに、播磨生協理事の巌　孝代氏が、同生協が81年の組合員集会で有リン洗剤追放宣言をおこなって以来、現在まで有リン洗剤は一切取り扱っていな

いこと、複合粉せっけん、無リン洗剤は取り扱っているものの、扱い量は全体の10パーセント未満であることなどを報告し、濃縮タイプの洗剤の供給が伸びる一方で、せっけんの供給は落ちている。」と、指摘した。

つづいて、県漁協婦人部連合会副会長の中元美枝子氏が、海を守るためには、せっけんの普及が必要であると強調。そのためのせっけんと合成洗剤の洗いくらべテストや組合員へのアンケート調査の実施、天ぷら油の廃油を利用したせっけんづくりへの取り組みを報告したあと、「播磨灘はおだやかで、海水が入れかわりにくい。富栄養化のために5月あたりからしょうゆ色の赤潮が発生し、そのあとは、ほうきではいたように魚がいなくなってしまう。漁獲量が近年減少しているのは水が悪いことと無関係ではない。漁家の生活そのものがおびやかされている。」と切実に訴えた。

灘神戸生協生活文化センターの概要説明を聞く参加者たち(生活文化センターで)

最後に、県農協婦人組織協議会副会長の田守栄子氏が、「エーコープフレーク粒状石けん」の全戸愛用運動で、1989年度は県内農協婦人部員数以上の購買実績があがったことを報告。

また田守氏は、7月に「石けん使用キャンペーンとして県農婦協役員・消費専門委員らが、神戸・元町周辺の街頭で消費者に粉石けんの小袋と安全性などを説明したチラシを配布したり、各農協婦人部で石けん洗剤力テストなどをとりいれた学習活動を展開したことを述べ、「1人ひとりに呼びかけていく中で、せっけん派と、合成洗剤派にはっきりと分かれているようだ。後者にどう働きかけていくかが課題である。また、義理で購入する婦人部員もあり、せっけんの利用を継続するためには、より積極的な学習・啓もう活動が必要である。」と強調した。

商品検査に見入る参加者
(灘神戸生協商品検査センターで)

その後、活発な意見交換がおこなわれ、司会の灘神戸生協理事・湯浅夏子氏は、「各協同組合が、環境を守るためにせっけんを広める努力をしている。普及に際して立ちはだかっている問題で、若い人のせっけん離れなど共通の部分がある。この交流会を契機に、各協同組合が協力しあって、さらにせっけん使用運動をすすめていきたいものだ。」とよびかけ、交流会をしめくくった。

参加者は、このあと、灘神戸生協生活文化センターと、同生協の商品検査センターを視察した。

当日は各協同組合が発行している料理集などの資料交換も行った

❋いま、協同組合では❋

生協　人間らしい豊かなくらしの創造！

～生協の90年代構想の理念～

日生協(日本生活協同組合連合会)では、1,266万人の組合員と2兆3,268億円の事業高にまで成長してきた生協運動を背景に、21世紀をめざす長期ビジョンの作成をすすめていましたが、第5次全国中期計画とともに、この6月に開催される日生協総会提案、決定することにしています。

誰もが、どこでも参加できる生協をめざして

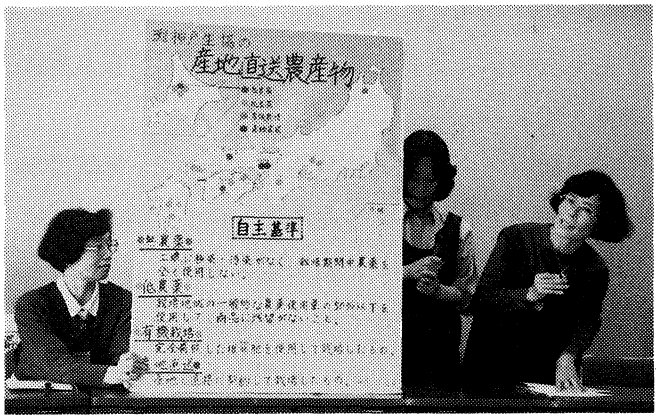
この構想案では、つぎの2点が中心になっています。

① 90年代の生協運動が、国民生活に役立つものとして『人間らしいくらしの創造』を担う協同運動をすすめ、「生活創造型」の生協づくりをすすめること。

② 地域のだれもが参加する生協をつくり、幅広い生活総合事業を展望し、消費者権利の確立と住みよいまちづくり・平和・環境問題など全人類的な課題に取り組み、協同組合のネットワークを広げる生協運動をめざすこと。

協同組合のネットワークを地域に全国に！
～協同組合セクターをめざして

この構想の中で「協同のネットワークを広げ、地域のなかにコミュニティをつくり人々が心を通わせ



豊かなくらしを築くために

合う人間らしいヨコ社会を形成することに貢献する」ことを強調し、あわせて「生協と農協・漁協の提携のもとで形成される協同組合セクター」への「中小企業の事業協同組合などの参加」を展望し、協同組合運動の長期的目標をうちだしています。

兵協連は40周年を迎えます

ところで、兵協連(兵庫県生活協同組合連合会)は本年で創立40周年を迎えます。1948(昭和23)年に施行された『生協法』に基づき、旧来の消費組合（産業組合法下）が生活協同組合に組織替えし、また、戦後の生活苦から多くの生協が誕生したことを背景として、1950(昭和25)年8月に創立総会を開催し結成されたものです。

発足当初は、9生協にすぎなかった会員数ですが40年を経た今日では34生協（他に、労働金庫、経済連が会員）を数えています。

記念誌『兵庫の生協の歩み』を発行します

この40周年を記念して、兵協連では解散した生協を含む全県下生協の歩みを記録する記念誌『兵庫の生協の歩み』を発行することにしているほか、変化の著しい『欧州の生協』を視察し交流する研修ツアーや記念生協大会の実施などを計画しています。

農協　米消費拡大３か年運動でお米をＰＲ！

もっと幅広く消費者に理解を求めて、自らも消費者拡大を――。

減り続けている米の消費を増やそうと、系統農協では、平成２年度から生産者と一体で全国的に「米消費拡大３か年運動」に取り組みます。

この運動は、米を中心とした健康で風土に合った食生活を発展させるため、まずは生産農家自らが参加しながら、消費者にＰＲしていこうとする運動です。

運動には４つの柱があり、その一つは「健康で風土にあった食生活運動の展開」です。これは、生産者と消費者に、あらゆる機会をとらえて“健康で風土にあった食生活”の理解を深めていきます。

乗降客らにお米をＰＲするミスお米（新大阪駅で）

二つ目は「米飯学校給食推進運動の展開」です。児童・生徒の健康な食生活と、食べ方を見直す観点から、米をはじめ、新鮮でおいしい安全な食材の供給に取り組みます。

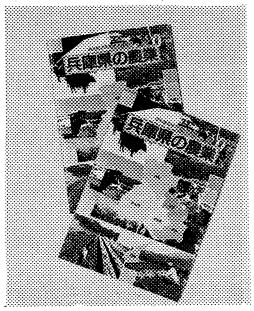
三つ目は「米消費拡大キャンペーンの展開」です。子ども、ヤング、主婦を対象に、健康で美しいライフスタイルのなかでの米のイメージづくりとともに、きめ細かな消費者のニーズにあったキャンペーンを展開します。

最後には、農家自らの課題として取り組む「１農家１俵消費拡大運動の展開」です。家庭での“おかわり一杯運動”や、“米の日”の見直しなどを積極的にすすめることにしています。

おにぎりセミナーでお米をＰＲ（兵庫県民会館で）

この３か年運動をすすめるため、全国の主要都市での「米センター」の設置や、消費者との交流事業など、さまざまなイベントを展開しています。

兵庫県においては、その一環として、３月27日、お米と健康を考える市民講座「おにぎりセミナー」を、県農協中央会と神戸新聞社の共催で開催し、会場の兵庫県民会館には、応募された消費者約300人に参加いただきました。



学習資料「兵庫県の農業」

当日は、女優の岸ユキさんらを講師に迎え、食と文化のつながりや、ごはんの良さを参加者に再認識いただきました。

県農協中央会では、４月以降も県内各地６会場で“食と農”をテーマにした市民講座を開催する計画をしています。また、県下の子どもたちに県内の農業を知ってもらおうと、平成２年度版小学校５年生用学習資料「兵庫県の農業」を昨年につづき作成し、４月のはじめに県下国公立834の小学校に寄贈いたしました。さらに、これとあわせ、実際に親子で稲づくりに挑戦していただこうと、県下の各小学校を通じて「バケツ稲づくり運動」にも取り組んでいく計画をしています。

バケツ稲作のたねもみ

漁協　組織に広がる魚食普及活動

今日、水産物の需要は、消費者の健康志向、グルメ志向等を背景として拡大傾向にあります。その拡大傾向に伴い、輸入水産物は近年大幅に増加していますが、国内水産物の需要は、おおむね横ばい状況にあると言えます。

このような状況の中、本県では、県漁連を始めとする漁協系統組織が、地元の水産物を中心に、「安全で、経済的しかも栄養特性の優れた魚介藻類の紹介」をモットーとして魚食普及活動に積極的に取り組んでいます。

料理教室で「のり」の普及に一役

最近の活動として、まず、全国第１位の生産量を誇る“兵庫県産のり”を使った料理教室をあげることができます。本県漁業のなかでも、生産量・金額ともに重要な位置を占めている“のり養殖業”に対する一般消費者の認識を深め、兵庫産「のり」の消費拡大を図ることを目的に、県下各地で活発に料理教室を実施しました。特に、食生活改善を中心に健康作りを考えるグループである“いずみ会”のメンバーを対象に実施した教室では、「のり」の生産・流通面さらには栄養面等の講話と併せ、「のり」を使った料理（手巻き寿司、祭り寿司、変わりのり巻きなど）及び魚のおろし方講習を行い、どの教室でも「兵庫のり」を始め、地元で漁獲される新鮮な魚を食べながらの試食会に話題がつきませんでした。

後日、アンケート用紙の回収結果から（“のり”の講話を聞き、今までなにげなく食べていたのりを改めて認識し直した！これからどしどし食卓にのせていきたい！新鮮な魚は生臭くなく、しかもおいしくてこれまでのイメージを一新した！）という声が多く、好評を博しています。

魚を使ったアイデア料理集も発刊

また、淡路地区においては、地区漁協婦人部連合会が、地元の魚を使って手軽にしかもおいしくいただけるアイデア料理集を発刊し、新聞、ラジオ等のマスコミで紹介され、淡路の魚の消費ＰＲに一役買っています。

このように数多くの普及活動を行っていつも感じるのは、多くの方々が、魚は栄養のバランスが良い健康食品であり、成人病予防などに効果があることはご存じですが、それをもう一歩掘り下げて、サンマ、イワシ、アジ、イカなどの経済的で身近に手に入る大衆魚ほど栄養特性が高いことや、どのような魚がどういった成人病の予防につながるのかということまではあまり知られていないことです。

従って、私たち漁協系統組織では地道ではありますが、安全で優れた特性を持つ食品を消費者に紹介していくという立場で、このような料理教室を今後とも継続して実施して行きたいと考えております。ちなみに、新年度は農協の組合員さんも対象に計画していますので、よろしくお願い致します。

フィルムライブラリーでＰＲ

最後に、県漁連では、少しでも多くの方々に魚の良さを知って頂くために、魚食普及用教材や各種資料を常備し、消費者団体等を対象として無料で貸出業務を実施しております。貸出教材は16ミリ映画、ビデオテープ、トラペンシート等(別表参照)で、魚の栄養や、世代にあった魚の料理方法について詳しく説明してありますので、研修・講習会あるいは料理教室等教材として是非ご利用ください。

お魚に関する教材　無料貸出

16mm映画フィルム（20分ー30分）
- 日本人と魚
- おさかなとヘルシー
- 楽しい給食ー魚からいわせてー

ＶＴＲ（20分ー30分）
- 望ましい食生活のために
- 魚をおいしく食べるために
- 魚料理の基本
- 母と子で楽しむ魚料理
- ヤングミセスのための魚料理のコツ
- それぞれの食生活における魚料理ー乳幼児期・家童期ー
- それぞれの食生活における魚料理ー思春期・成人期ー
- それぞれの食生活における魚料理ー中年期・老年期ー

ＯＨＰ（オーバーヘッドプロジェクター）用トラペンシート（１テーマ・10枚セット）
- 私たちの食生活と魚食
- 日本の魚
- 魚と栄養と調理
- 水産業と私たちのくらし
- 魚の流通と消費の実態
- 日本の水産業
- 魚の栄養とバランスの良い食事
- 漁業生産
- 魚の資源としての重要性
- 乳幼児期、学童期と魚
- お魚料理アラカルトー基礎編ー
- 魚食と日本人

協同組合運動への提言

忘れかけた教育と意識化

神戸市外国語大学生協
理事長　小林致広

協同組合運動の出発点には、生きのびるために、ひとりではなく協同して問題に対処していこうという基本理念があったと思います。

「生きのびる」なんて、現在のわれわれには縁のないことばではないでしょうか。しかし、いまもなお「生きのびる」ことが切実な課題である人々のほうが、この地球上では多数派であることを忘れてしまうほど、われわれの感覚が鈍くなっているとも思えません。とはいうものの、現在の日本の協同組合運動を、「生きのびる」という理念で展開させることは不可能なのでは……。現代日本の状況に対応した協同組合運動の理念、あるいはモデルとなるものを、われわれはどのように探り、構築していけばよいのでしょうか。

協同組合運動の誕生の地、最先進地域であるヨーロッパの協同組合運動のなかに、モデルを探せるかもしれません。いや、東南アジアや東アジア諸国からだけでなく、西欧諸国からも、日本の協同組合を視察にくるくらいだから、もはや他所にモデルを求める段階は終わったという意見もあるでしょう。社会主義と同様、協同組合運動は、もはや時代遅れのものだという極論も出るかもしれません。“日本経済の肥大化とともに歩むうちに、日本の協同組合運動は、先の展望のないブラックホールに突入してしまったのではないか”このような危惧を抱くのは、ひょっとすれば、運動の現場に踏みこまず、汗もかこうとしない者の思いあがりかもしれません。

モデルは発展途上地域にあるのかもしれません。「生きのびる」ため、豆と米だけの食事でやせた身体にムチ打ち、協同組合を設立し、それまで土地をもったことのなかった100家族ほどのメンバーの生活を防衛しようとする農業協同組合を1昨年、ニカラグアに行って訪れたことがあります。

当地では、長年にわたるプランテーション経済のため、農業労働者はトウモロコシなど自給用作物栽培のノウハウをまったく知らなかったのです。

協同組合設立の最大の難問は、トラクターや農業機械、燃料や肥料の調達といったインフラストラクチャーではなく、まさに組合員1人ひとりの教育ということにあったのです。

また、メキシコ南部のコーヒー生産地帯で、コーヒー公社や仲買人の搾取から生産者を防衛するため、集荷協同組合を村々に組織する活動を担っている1人の青年の話を聴く機会もありました。

彼は、「活動の出発点は、村のおかれている状況、直面している問題と、その原因などを村の人々とともに議論しながら明確にしていくことである。言語を習得するすることも大前提となる。」と前置きしたあと、「それもなしに政府からコネで資金を引き出して、この種の協同組合が設立された地域もあるが、そのような場合は特定の層の腹を太らすだけに終わることが多い。やはり、協同組合を構成する人々の意識化がなによりも重要な活動である。」と語ってくれました。

そして、この種の活動のリーダーたちは、つねに弾圧の対象となってきたのです。

彼らの協同組合運動の目標、そして敵は明確であり、運動する手足ははっきりと視界のなかにあります。それにくらべ、現代の日本の協同組合運動は、「成人病」をわずらっているといえましょう。商品や貨幣の流れはコンピューターで掌握してはいますが、その生産・流通にかかわる各々個人の働きや疲労については、無反応という徴候はないでしょうか。

肥大しすぎ自己の手足が見えず、運動しているという感覚を失なった「成人病」患者へのよきアドバイスは、“ともかく運動し、身体をしぼる”ということではないでしょうか。できれば、アスレチッククラブではなく屋外で……。

協同組合の新しい流れをつくるために

第２回兵庫県協同組合研究会開く

兵庫JCCは、平成元年11月28日・29日の２日間、「第２回兵庫県協同組合研究会」を、灘神戸生協生活文化センターで開催した。

今回は、協同組合経営研究所の「協同組合現地研究集会」と共催で開催したもので、研究会には、県内から120人、県外30人、あわせて約150人の協同組合関係者が参加した。

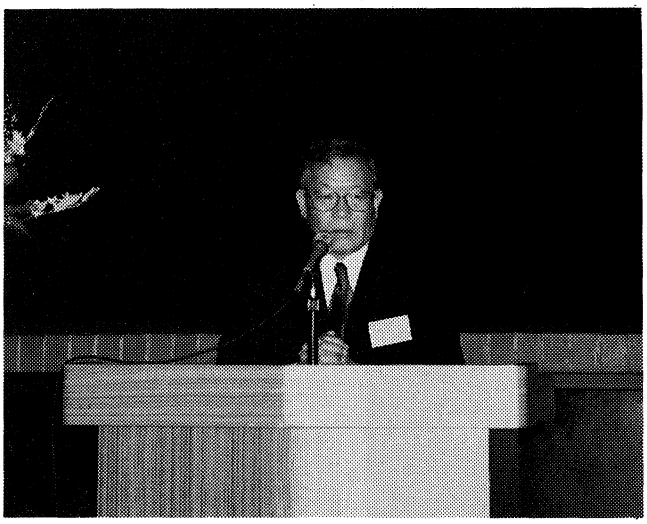
いま協同組合は多くの課題に直面しているが、21世紀の協同組合運動をめざして新しい流れをつくり出すための努力も積み重ねられており、そうした実践を具体的な形で報告しあいながら、さらに実践活動の輪を拡げようとの願いをこめて、「協同組合の新しい流れをつくるために」を統一テーマとした。

当日は、兵庫ＪＣＣ幹事・県生協連の安東正行常務の司会で進められた。協同組合経営研究所の山口巌副理事長のあいさつのあと、兵庫ＪＣＣを代表して、県生協連の高村勣会長が、「激動する世界情勢のなかで、各協同組合が相互協力のもとで、新しい時代の担い手となるよう努力し、成果をあげていきたいものだ。そのためにも、今回の研究会は、意義深いのがある。」とあいさつした。

つづいて各協同組合の代表５人が、それぞれ実践報告を行った。

まず最初に、灘神戸生協・フードプラン開発室の石川鴻二マネージャーが『産地との提携の課題』をテーマに報告した。そのなかで石川氏は「日本は温暖で野菜も果物も豊富にとれる。この豊かな自然に恵まれた条件を生かし、安心・安全な食べ物が得られるよう努力しなければならない。わが灘神戸生協の“フードプラン”は、今後食べ物を作るところから、安心できる条件を明らかにし、栽培方法や飼育方法から出荷段階までの基準を明確にしていくとりくみを進めようとしている。」とのべたあと、「これからは、消費者も生産者と一緒になって“科学”する時代になるだろう。自然環境を配慮しつつ、消費者が生産者とお互いに理解しあいながら、改善していくことも協同組合の仲間同士だからできるものと思う。」と結んだ。

灘神戸生協
石川マネージャー



あいさつをする県生協連・高村会長

つづいて、篠山町農協の西田一治組合長が『消費者のニーズに応える農産物づくりへのとりくみ』と題して報告した。西田氏は、「篠山町農協は、“人間と自然環境を大切にする農業”をテーマにとりくんでいる。私たちは、このテーマに基づき、よそにない優れた安全でおいしい農産物をつくらねばならないと考えている。」と、篠山町農協の基本方針を説明したあと、「これ

篠山町農協
西田組合長

からは、消費者に新鮮で旬のものをより多く提供していかなければならない。そして、多くの消費者の方々に、わが丹波地方に来ていただき、地元の農業を知っていただくことが大切だ。」と、農業の発展のためには、つねに消費者の理解と協力が必要であることを協調した。

次に報告したのは、兵庫県漁連の突々淳氏で、テーマは『将来への始発点――さきゆきガザミおもしろい』。突々氏は、「瀬戸内海で卵を抱えたワタリガニを、漁業に携わる若者たちが保護し、増やしていこうとする“抱卵ガザミ保護運動”のとりくみ経過を報告した。また同氏は、水質汚染の深刻さについてもふれ、「スプーン一杯の刺し身のたれを浄化するのに、ドラム缶一杯の水が必要である。“森は海の母”と言われるが、良質のプランクトンを生む広葉樹などの原生林が、針葉樹に変わっただけで、海の魚に大きな影響を及ぼす。」と、すべてが循環している自然環境のなかの一つのバランスの崩れがひき起こすこわさを指摘し、石けん使用運動など、環境保全対策を協同組合間でもっと積極的に展開する必要があると訴えた。

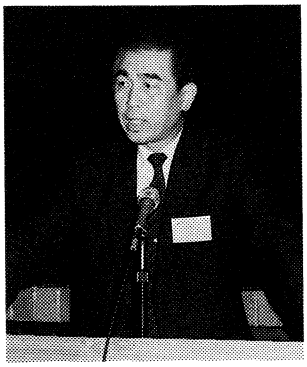
兵庫県漁連
突々　氏

つづいて、ハリマ一宮農協の中尾卓巳組合長が、『心豊かな地域社会をつくるために』と題して報告。中尾氏は同農協の婦人総代の実態や“母と子のふれあい文庫”の運営などについて詳しく説明しながら、「いま心の豊かさを求める運動の主役は若い女性であり、次代を担う子どもたちである。これからの農協に“新しい流れ”をつくるためには、この女性や子どもたちを中心とした生活文化活動をより積極的にすすめていく必要がある。」と強調した。

ハリマ一宮農協
中尾組合長

統括討論で活発な意見が交わされた

最後に報告したのは、灘神戸生協の木村正人専務で、テーマは『灘神戸生協のこれからの事業展開』である。木村専務は、「1991年はわが生協の70周年にあたるが、その年までに組合員数は100万人を突破するであろう。この70周年の記念事業として“生協学校の設立”をすすめているほか、“ふるさと村”計画もすすめ、1990年に千種町に開設する。他にも場所を選定中である。生協では、これらの事業を展開して、都会の人々が自然に接しながら地域の人々との交流を深めていきたいと考えている。」と述べた。



灘神戸生協　木村専務

そのあと、神戸大学農学部の山本修教授をコーディネータにおき、各実践報告者がパネラーとなり総括討論を行ったあと、当研究会のまとめとして、山本教授が、「各協同組合がそれぞれの立場で、よりよい地域社会づくりをめざして真剣にとりくんでいることと、そのための共通の課題も確認しあえたと思う。この共通の課題をお互いが協力しあって解決していきながら、21世紀に向けての新しい協同組合の流れを築いていってほしい。」と、しめくくり、２日間の日程を終えた。

神戸大学農学部
山本教授

協同組合運動に生きる

21世紀をめざし今こそ、兵庫ＪＣＣの認識を!!

神戸市西農業協同組合
企画監査室長 **中尾　脩**

21世紀に向けてますます国際化、情報化、自由化が進展するなかで、農業情勢は、あらゆる面で激動の局面にあると言って過言ではない。これらの情勢のなかで、1988年に開催された第18回全国農協大会で決議されたテーマは「21世紀を展望する農協の基本戦略」そのスローガンは“国際化のなかでの日本農業の確立と、魅力ある地域社会の創造”である。兵庫県においても、同年に開催された第24回県農協大会で「新たなる協同活動への挑戦」“ひらかれた魅力ある農協をめざして”をスローガンに取り組むことを決議した。

とくに全国大会で決議された実践項目の中に、「新たなる運動の展開」として、農協はもとより、生協・漁協・森林組合との相互連携が強調されている。農協はこの決議をふまえ、農業・農協についての理解と認識をいただくために、地域消費者との交流活動をすすめている。

わが神戸市西農協の管内では、とくに大型量販店の進出が目立ち、生産圏と消費圏が一体化した状況にあり、これらに対処した方策が急務となっている。そこで農産物の生産・販売においては、消費・流通ニーズにマッチした、ホンモノ志向（自然、安全、新鮮など）をめざし、３Ｈ農業（HEALTHY、HIGH－QUALITY、HIGH－TECHNOLOGY)をいかした、産地直結システムとして、生協、量販店など、地域への対応をすすめるため、「ベジタ・コム・プラン」（VEGETA－COM－PLAN)を展開しつつある。

この「ベジタ・コム・プラン」（やさいのまちづくり計画）は、管内の都市的な立地条件をいかし、農産物の生産－流通－消費の一貫した体系で対処しようとするものである。

「ベジタ・コム・プラン」とは、VEGETA(やさい)の“COM”すなわちCOMMUNICATION(相互・交流)、COMPASS(羅針盤・周囲)、COMMUNITY(社会・団体)など、これら“COM”を統合して名付けたもので、地域消費者との相互交流を深め、ともに食生活を考えながら、管内農産物のブランド化をすすめようというものである。

日ごとに都市化が進展する私たちの地域で、この「ベジタ・コム・プラン」をいかに戦略化していくかが今後の最大の課題である。

また、生活事業においては、消費者のニーズの多様化、高品質化に対応していくため、県内をはじめ全国の農協とも提携して、より安全で新鮮な特産物などの共同購入運動をすすめている。今後は、各協同組合間との提携を促進し、全国農協ネットで、北は北海道から南は沖縄県に至るまで、それぞれの地域特産物の共同購入運動をより積極的にすすめていきたいと思う。

協同組合間の提携活動は、各協同組合間での情報連絡を密にすることはもちろんのこと、各種事業での提携活動も必要である。わが兵庫県においても、ＩＣＡ原則に基づき、各協同組合での相互理解と連携、協調のために「兵庫ＪＣＣ」が結成され活動を展開中である。

今後、農協が地域に根ざした協同活動を展開し、真の“農協らしさ”を発揮していくためには、前述したように、各協同組合間での事業提携の促進が不可欠であることを充分に理解し、私たちは、いまこそ「兵庫ＪＣＣ」の意義の再認識と、その役割を発揮するときではなかろうか。

やさしい協同組合論（最終回）

とりあえずの最終回

1986年夏から書き始め、もう4年になりました。年に3回の割合で、少しずつ書いていくのも少々疲れます。余りに長い雨垂れ連載は、どうも間が抜けてよくありません。12回と言うのは、毎月連載なら1年分で一つの区切りでしょうから、残りはいつかの機会にまとめることにして、ひとまずここらで打ち切ることにします。とは言うものの、まだ書き残していることは沢山ありますから、それを挙げて締めくくりに代えましょう。

これまで、協同組合における民主主義と非営利主義については、一通りのことは話したつもりです。もっとも非営利主義の現れとしての奉仕のための事業、純資産の非営利的処分という原則については、触れたものの、門戸開放、資本利子率の制限という原則の意味までは言えていません。門戸開放の原則は協同組合人が自らの組織を自らのみのものとしてではなく、社会的存在と見なしていることを、原則の形で示したものです。また、資本利子率の制限は、一面では優れた現実感覚、実践主義の産物であり、同時に営利主義を(少なくとも部分的には)否定し、資本主義的肥大への歯止めとなっています。

協同組合について語るべき3番目のものは“それが社会的正義や公正の観念と深く結び付いている”ということです。公正取引、生産物の純良性、それに教育の原則は、この観念と結び付けて考えることができます。既に、協同組合が経済的事業であるとともに社会運動でもあることは、非営利主義を論じたときにも触れてきました。

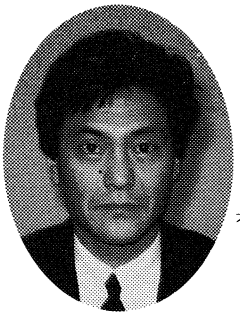
これまでに書いたことを読み返すと、個人的利益の実現という一方の側面を強調し過ぎたかとも思われます。この働き自体は、協同組合の基本ですから、強調自体、間違ってはいません。この側面がややもすれば議論から落とされ気味なことを考えれば、なおさらです。しかし、それはむき出しの私的利益追究ではなく、時には、その個人的、集団的利益が、多少損なわれるのを(判断の誤りではなく)承知の上で、あえてそれを選択することがしばしば起こり得る社会的存在でもあります。（このような行動動機を経済学者のＡ・センは「コミットメント」と呼んで、非常に重要視しています。『合理的な愚か者』(勁草書房)を見て下さい。）

4番目に触れるべきことは“その実践的性格、堅実性について”です。ジードは、協同組合の強さを、その事業的成功よりも、失敗を重ねてもいつかまた蘇る思想的強さに求めようとしています。しかし、協同組合が他の社会運動と際だって異なる点は、それが社会的、政治的理念をそれ自体として追究するのではなく、経済活動を通じて自らの社会理念を実現させようとすることにあります。彼自身、別のところで強調しているところです。飛躍せず、ゆっくりと着実に倦まず弛まず、というのは、それ自体、信念なのですが、協同組合運動は、そのような信念を背負っています。現金取引、市価主義の原則も、(僕自身、これまでそうしてきたきらいはありますが)単に事業的成功を図るためだけの現実的妥協の産物と割り切るわけには行きません。

最後に、協同組合は自助と相互扶助の運動であり、自由のシステムであると言えます。自発的加入、門戸開放の原則は、協同目的のために手を携えようとする自立した個人を暗黙の内に前提しています。全面的合一(もたれ合い、ぶら下がり)ではなく、相互の自立の上に立った協力、連帯が、協同組合の目指すところです。そのような自由のシステムが必要条件とする寛容の原理の端的な表れとして、政治的、宗教的中立性を見ることができます。

協同組合にとって、自助と相互扶助のいずれが欠けても困ります。しかし、話の先を言ってしまえば、自助によって支えられた相互扶助、ではなく、むしろ、相互扶助の裏付けを受けた自助、と言いたいというのが、とりあえずの結論です。　（中久保邦夫）

協同組合点描



目指す！「組合福祉生協」

兵庫福祉生活協同組合
統括部長　漁士　優

私ども、兵庫福祉生活協同組合（ふくしせいきょう）は、働く人たちの福祉の向上をはかることを目的として、昭和29年12月に設立いたしました。今年は、設立35周年という、いわゆる一つの節目であり飛躍を期すという、非常に大切な年を迎えました。

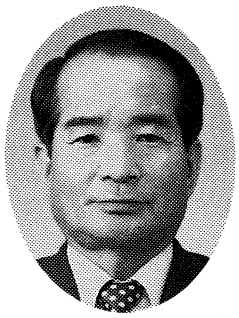
設立以来、職能教育を行う職業福祉学院の運営、住まいの改善、住宅の供給（マンション及び戸建住宅の分譲）、金融福祉事業等を行ってきましたが、現在では、兵庫県下の勤労者の住宅福祉の一環として、年金福祉事業団被保険者住宅資金転貸融資制度（年金住宅融資）の事業を主として行っております。

今後は、時代の激流を少しでも早く読み取り、21世紀に向けての国際化・情報化・技術化・高齢化における勤労者福祉事業のあり方を模索し、実践していくことが私たちに与えられた使命であると思います。

当生協は、運動体であると同時に事業体であるため、運動と運営という時として相反する課題を両立させ、大胆な発想に立った運動と事業の推進をめざした積極的な取り組みが必要です。そうした中で、事業の推進を実践し、生協のモットーである「一人は万人のために万人は一人のために」を基調として「愛と協同」の精神を将来に伝承していくことが、今の時代を担当する私たちの最も需要な責任であり、使命であるものと思います。

「人と人との協同の和」を広げる中で、無形財産の蓄積をはかりながら、21世紀に向けた『総合福祉生協』を目指します。

日本一 山田錦の産地づくりをめざして



東条農業協同組合
参事　武中史郎

私たちの町は、播州平野の最東端に位置しており、総面積5,000ヘクタール、うち耕地面積は760ヘクタールである。町の中央部を加古川の支流、東条川が東から西へ流れており、この川に沿って南北に集落や耕地が海抜80〜90メートル程度の地帯に広がり、また、三方を丘陵状の山に囲まれた、比較的自然災害を受けることが少ない地帯である。

この地でとれる農産物をみてみると、胸を張って自慢できるものに、何といっても酒造りには欠かすことのできない、日本一良質の醸造用配米（もとまい）山田錦がある。この米は一般食用米と違って、粒の真ん中に心白というものがあり、よく精白してその心白部分のみを麹米として使用する。この米を百パーセント使った日本酒が、いま流行の特上吟醸酒である。

幸い我が東条町の土、水、気候が日本一の山田錦を生み出す、自然条件に恵まれているのだと思われる。いま、市場では農産物の産地間競争が叫ばれているが、東条町が山田錦作りにとって、自然条件に恵まれていると言って、安閑としていては、たちまちにして他の産地に遅れをとることは、火を見るより明らかである。そこで当組合では、昭和56年から土壌分析室を造り、専門職員を配置してコツコツと分析活動を続け、全地域に土づくり運動を展開している。

一方、この恵まれた地味を生かして、山の芋作りも推進し、灘神戸生協と契約して供給しているが、粘りがあっておいしいと好評を博している。いまひとつ栽培面積の拡大が計れないのが残念である。

これからも根気よく土をつくり、自然の水を守る農業を展開して、美味で、安全な食品の供給産地をめざしていきたい。

協同組合研究ＮＯＷ

＜最終回＞

協同組合関係の書籍を多く出版している経済・社会科学系の書店のＰＲ小冊子に「最近、協同組合に関連する研究者が元気づいている。」という書き出しで、協同組合関係者のへのエールが送られています。２年後のＩＣＡ東京大会を控えるとともに、世界が激しく動き、その枠組みが揺れている中で、協同組合は未来においても最も価値あるシステムとなるはずで「そうするための苦悶の時期」が今だというのです。全体としては、既得権に関わる揺すぶりの中で、誰もが元気というわけでもなく、研究者の間での議論もまだ「激しい議論」とまでは行かないようですが、特にマルコス報告を受けて、協同組合の基本的価値、いわば協同組合運動のアイデンティティーを巡る議論が活発になってきています。

今回取り上げる内、３冊はこの出版社からでており、また同じく３冊は(毎回のように名前がでる)農林中金研究センターに関連しています。

まず第一に取り上げるべきものは、堀越芳昭『協同組合資本学説の研究』(日本経済評論社)でしょう。協同組合の出資金の性格を巡っては、大変ムツカシイ論争があります。本書は協同組合の資本と企業の側面から接近して、その本質に迫ろうとする労作です。人が資本を支配する「協同組合制度は未来社会における基礎としての役割を担うことのできる唯一の社会制度である」という認識から、その前途多難を予期しつつ、歴史的転換期にある今こそ、歴史的学説史的研究を跳躍台にしようとします。議論の整理からだけでも相当の価値がありますし、協同組合資本の社会的性格を強調し、従来の権威の枠組みを外して議論しようとする姿勢は貴重です。難をいえば、議論のスタイルが少々古風（勿論それは研究の緻密さと裏腹なことではあるのですが）なことでしょう。（細かいことをいえば、capital socialを「社会的資本」と訳するのは読み込みすぎ、本旨への誤解を招きます。せいぜい「組合資本」）

レイドロー報告が、解説や書誌情報を伴って『西暦2000年における協同組合』(日本経済評論社)として改訳・出版されました。関係者の非常に強い熱意がこの改訂訳を実現したと伝え聞いています。

1988年度の農林中金研究センター「協同組合基礎理論研究会」の報告集が『協同組合の基本的価値』(家の光協会)として発刊されました。特に最初の３章はマルコス報告を踏まえて、伊東勇夫(ch.1)、白井厚(ch.2)、三輪昌男(ch.3)という学会の中心に位置する人々が議論をしているので、これからの議論のたたき台として役に立つでしょう。最終章の丸山茂樹「生活者の未来と協同組合」が、新しい社会運動の潮流と積極的に関わって行こうとする協同組合の模索を示しており、興味深く読めます。

「基本的価値の探究」と副題が付された荷見武敬『協同組合の恋心』(日本経済評論社)は、著者の講演、短文、評論を集めたものです。資本主義的定向肥大への警鐘を打ち続け、今こそ人間としての正気を取り戻せと説き続ける著者の熱情を表現する上で、表題は出来すぎている位、決して年を気にすることはありません。（それにしてもこの恋心と「サロメ」の取り合わせは不可解。ましてや、A.B.のサロメが本書の口絵にふさわしいとは思えない。）

最後に、ちょっと趣旨にはずれますが、栗原るみ『マネーゲームの時代』(八朔社)。著者が農林中金研究センター研究員の時代に青年を対象とした貨幣感覚の調査を基にして「財テクマネーゲーム」を考えるというもので、結論的に若者の感覚は以外にまとも、ということです。読み方に全部諾けるわけではないが、おもしろくはありました。

本欄も僕の担当はとりあえず今回で終わり、次回から衣装も役者も変わります。約５年、駄文にお付き合い願い、お礼を申し上げます。　（中久保邦夫）

編集後記

４年間にわたり、中久保邦夫先生に「やさしい協同組合論」並びに「協同組合研究NOW」として執筆いただきましたが、先生のご意向もあり、今回で最終回とさせていただきました。

なお、機関紙『兵庫JCC』は、下期から内容を新たに編集発行して参りますのでよろしくお願いします。　（T）